

デザイン専攻 ヒーリング研究領域

WANG Zhengyi

# ワン ジョンイ



## 正憶

セメント、蜜蝋、絹糸、フォーム、鏡、バケツ、音声

## 正憶

本作は、隠匿された生命のエネルギーを物理的空間に体現する試みである。背景は、私の家族における「三世代の女性たちの抑圧の連鎖」の考察にある。当時16歳の祖母は、政治運動の中で父親を失い、学業を断たれて結婚を強いられた。その激痛は、時代の沈黙の中に封じ込められた。一方、母は宗教に「救い」を見出し、過酷な現実と折り合いをつけてきた。私は、長らくその世代間の痛みを直視することを避け、ようやく残された記憶の断片と歴史の隙間から、彼女たちの経験と感情を「推測」し、再構築することを試み始めた。

方途として、祖母の家の庭にあったコンクリートの地面と井戸の記憶を、物質的に再構築した。15平米の床を自らの手でコンクリートによって埋め尽くした。この標準化された工業素材は、あの時代から遍在した「効率」「正しさ」や「秩序」の象徴であり、個人の生活の凹凸を塗りつぶし、覆い隠そうとする。鑑賞者はここに入り、まず冷徹な凡庸と硬直を感じるだろう。しかし、そのひび割れた隙間には、茜色の蜜蝋が隠されている。雌の働き蜂が巣を作るために自らの身体を削って分泌する物質であり、抑圧された女性たちの生命力のメタファーである。そして、鑑賞者の視線は微かな音が響く井戸へと誘われる。そこは記憶の深淵であり、歴史への入り口である。そこには、40年前、母が中国の工場で織っていた帯の絹糸が垂れ下がっている。羽化を阻まれ、命と引き換えに抽出されたこの糸は、個人の犠牲の上に成り立つ家族の連続性を象徴している。それは同時に、祖母から母、そして私へと続く、逃れられない「血脈」でもあるのだ。

作家龍應台は、「個人の記憶の合流こそが、大文字の歴史への抵抗となる」と述べた。本作は、まさにその実践である。正統な歴史的記述から抹消された「女性たちの傷」は、一つの具体的な「記憶の場」として体現された。たとえそれが又聞きで不完全な記憶であったとしても、銘記しようとする意志そのものに力がある。本作は単なる家族史を超え、沈黙させられたすべての個人史の語りとなる。「正憶」とは、10代の私が自ら名付けた名前であり、「正に記憶する」というアクションなのだ。